

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2016.12) 平成28年度:13-14.

看護学生のSNS利用状況と自尊感情についての検討

櫻小路 桃子, 土本 真維

看護学生の SNS 利用状況と自尊感情についての検討

櫻小路 桃子、土本 真維
(指導：苫米地 真弓)

緒言

今日、スマートフォンの普及とともにソーシャルネットワークサービス(以下 SNS)の機能や構成も多様化しており、特に青少年においては日常生活の一部となっている。日本の高校生は他国と比べて SNS の利用頻度が最多となっており、また自尊感情が低く、内向き志向であると報告されている¹⁾。しかし大学生や看護学生を対象にした文献は少なく、先行研究では SNS の利用と自尊感情との関係が明確化されているものはない。私たちは SNS の利用によって自己の存在意義や価値を見出しているのではないかと考え、SNS の利用状況と自尊感情との関係について調査し、検討した。

用語の定義

自尊感情：人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方のことであり、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のこと²⁾。

方法

1. 研究対象：B 大学看護学生 1～4 年生の 229 名
2. 調査方法・測定指標：無記名自記式質問紙(平成 28 年 8～9 月実施)で調査を行った。Rosenberg Self Esteem Scale(RSES)(1965)を山本、松井、山成(1982)らが邦訳した自尊感情尺度日本語版 10 項目、対象者の基本属性及び SNS の利用や目的に関する質問項目 25 項目(自作)を用いた。
3. データ分析方法：統計 SPSS Startistics22 を用いて分析した。単純集計をした後、2 群間比較は Mann-whitney の U 検定、3 群間以上の比較は Kruskal-Wallis 検定で、有意水準 5%とした。
4. 倫理的配慮：対象者に口頭および文書で研究の趣旨、参加は任意であること、研究への協力の是非が個人の利益・不利益に影響しないこと、研究目的以外での使用をしないこと、学内で研究結果を公表することを説明した。データは保護し、研究終了後に調査用紙をシュレッダーで破棄した。

結果

配布数 229 部に対し、回収数は 217 部、回収率 94.7%、そのうち有効回答数は 216 部で、有効回答率 94.3%であった。

1. SNS の利用状況について

1) 各アプリケーションの利用率・目的、利用時間
SNS を利用できる電子機器の所有、SNS の利用率はともに 100%であった。各アプリケーションの利用率はいずれも半数を超えており、その中で最も利用するものを「LINE」と答えた人は 86.9%であった。最多利用目的は「LINE」のみ「連絡手段」で、その他のアプリケーションは「友人らの

投稿の閲覧」がいずれも半数以上であった(表 1 参照)。

SNS の利用時間は「0 分～60 分」26.9%、「60 分～120 分」39.4%、「120 分以上」33.8%で、120 分未満の利用が半数以上であった。SNS の利用による日常生活への支障の有無に関しては「支障がある」が 22.2%、「支障がない」が 77.8%で 8 割弱の人が支障なしと答えた。SNS をはじめたきっかけは「周りの人がやっているから」が 50.2%、「友人らと連絡をとるため」が 34.4%であった。

表 1 各アプリケーションの利用率と利用目的

アプリケーション	利用率(%) (複数回答)	最も利用しているもの(%)	最多利用目的(%)
LINE	100%	86.9%	連絡手段(83.9%)
Twitter	87.5%	12.6%	友人らの投稿の閲覧(51.1%)
Instagram	58.3%	0.5%	友人らの投稿の閲覧(50.8%)
Facebook	52.8%	0%	友人らの投稿の閲覧(67.0%)

2) 実名公開、投稿について

実名公開について「LINE」では「実名を制限なく公開している」が 57.2%で半数を超えていた。「Twitter」では「実名を公開しているが、範囲を周りの友人らに限定している」36.0%、「周りの友人らが知っているユーザー名を公開している」48.0%で、「Instagram」では「実名を公開しているが、範囲を周りの友人らに限定している」23.2%、「周りの友人らが知っているユーザー名を公開している」34.4%で、どちらも公開範囲を限定かユーザー名での公開が半数を超えていた。実名登録が基本とされる「Facebook」でも「実名を公開しているが、範囲を周りの友人らに限定している」が 53.6%で半数以上であった。

SNS への投稿の有無は「投稿する」78.2%、「投稿しない」21.8%で 8 割弱の人が投稿していた。どのような時に投稿するかについては「楽しいことがあった時」が 68.2%で、投稿内容については「私生活について」が 40.0%、「イベント」が 34.7%であった。自分の投稿に関して反応が得られた時の気持ちは「他者が共感、称賛を示してくれて嬉しい」が 79.6%、また自分の投稿に関して反応が得られなかった時の気持ちは「何も感じない」が 77.3%で最多であった。

2. 自尊感情尺度について

自尊感情尺度得点(以下尺度得点)は最小値 14、最大値 50、平均 30.45(±6.335)であった。尺度得点の群間比較では学年や性別、SNS の利用時間、写真公開や投稿の有無では有意な差はみられなかった。一方、SNS の利用によって日常生活への

支障がある群とない群で比較すると、支障がある群の方がいない群より尺度得点は有意に低かった。また LINE の既読無視を気にする群と気にしない群で比較すると、気にする群の方が気にしない群より尺度得点は有意に低かった(表 2 参照)。

表 2 自尊感情尺度得点の群間比較

項目	n(人)	M±SD	P 値
日常生活への支障	あり 48	28.85±6.474	0.022*
	なし 168	30.90±6.241	
LINE の既読無視	気にする 144	29.62±6.097	0.001**
	気にしない 67	32.41±6.397	

Mann-whitney の U 検定 *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

考察

1. SNS の利用状況について

1) 各アプリケーションの利用率・目的、利用時間

B 大学の看護学生の全員が SNS を利用しており、また各アプリケーションの利用率が半数を超えていたことから、B 大学の看護学生にとって SNS は日常生活の一部となっていると言える。利用目的では「友人らの投稿の閲覧」が最も多く、「LINE」のみ「連段手段」が最多であった。SNS をはじめたきっかけは「周りの人がやっているから」が最も多く挙げられていた。以上のことからアプリケーションの利用に際して、投稿の閲覧によって友人らを知ることや、友人・家族らとの交流を目的としていることが推察される。

SNS の利用時間に関しては、20 代の SNS の平均利用時間は 91.1 分と報告されており³⁾、女子大学生の携帯電話の 1 日平均使用時間は 150 分以上が半数を超えていたと報告されている⁴⁾。本研究結果は、SNS の利用時間が 120 分未満の人が半数以上であり、先行研究と比較をしても利用時間は長くはないと言える。また SNS の利用による日常生活の支障の有無は、ないと答えた人が 8 割と多かったことを含め、B 大学の看護学生は支障のない範囲内でかつ節度のある SNS の利用ができていると考えられる。

2) 実名公開、投稿について

実名公開について「Twitter」「Instagram」では公開範囲を限定するか、ユーザー名での公開が主で、実名での登録が基本とされる「Facebook」でも公開範囲を限定する人が半数を超えていた。これに対して「LINE」は制限なく実名を公開する人が多かった。これは「LINE」の利用率が最も高く、広く利用されていること、かつ無料で手軽なものであり、連絡手段としてより有効的に利用するためであると考えられる。

SNS への投稿については、8 割弱の人が投稿しており、内容は私生活やイベントに関するもので、楽しいことがあった時の投稿が多いことがわかった。これより、私生活やイベントには友人らの関わりがあることを考えると、SNS への投稿は友人や家族らとの楽しい思い出を共有するなどし

て、より周囲の人と深く関わるために利用していると考えられる。また自分の投稿に関して反応が得られた時は嬉しいと感じる人が多かった。しかし反応が得られなかったからといってネガティブな感情を抱く人は少なく、友人からの反応をポジティブに受けとめている人が多かった。そのため B 大学の看護学生は周囲とのつながりを大切にしており、友人関係が充実しているのではないかと考える。以上より、SNS の利用目的や投稿には友人らが影響しており、周囲とのつながりを重視していることがうかがえ、荻野ら⁵⁾が述べた友達関係を良好に保つためのツールとして SNS を使用しているという結果とも類似している。

2. 自尊感情尺度について

B 大学の看護学生は、尺度得点の平均値が女子大学生の 25.35(±3.05)⁵⁾より高値で、自尊感情が高い傾向にある。自尊感情が高い人は自分を価値ある者として評価できると言われており、一方白石ら⁴⁾は自分自身を大切にできない者が、他人を思いやる感情を持っていないのは当然であると述べている。

結果 2 より、SNS の利用によって日常生活への支障がある群の方がいない群より尺度得点が有意に低かった。山本ら²⁾によると自尊感情が低いと自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていると言われている。このことから、自分に自信がもてず自分以外の人を優先させる傾向があると考え、日常生活への支障がある群は、自分を大切にできず節度のある SNS の利用が難しいことが考えられる。

また LINE の既読無視を気にする群の方が気にしない群より尺度得点は有意に低かった。これは相手からの返信がないと、自分の発言に価値があるのかや相手に対して意味のある発言であったかと、自分の発言を肯定できずに気にするためであると考えられる。

本研究は対象者が B 大学の看護学生に限定されていたため、今後は対象者を増やし、検討していく必要がある。

引用文献

- 1) 国立青少年教育振興機構 (2015) 「2 インターネットの利用や知識」 「9 自分について (自分はダメな人間だと思ふことがあるなど)」 <http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/98/File/gaiyou.pdf>, <http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/98/File/12.9.pdf>. (2016/11/17 閲覧)
- 2) 山本真理子編 (2001) : 心理測定尺度集 I - 人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉, 初版, サイエンス社.
- 3) 総務省情報通信政策研究所 : 「平成 26 年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査 主なポイント」 : http://www.soumu.go.jp/main_content/000357568.pdf. (2016/11/17 閲覧)
- 4) 白石龍生, 長光李恵, 千田幸美, 上野奈初美 (2011) : 携帯電話の使用と自尊感情との関係, 大阪教育大学紀要 第三部門 第 60 巻 第 1 号, 51-56.
- 5) 荻野正美 (2014) : 若者における SNS 利用行動およびリスク認知の検討-LINE と Twitter を中心に-, プール学院大学研究紀要 第 55 号, 57-72.